「戯画の効能：提案三件」『ジャポニスム研究』、21号、2001年9月30日、38-41頁

# 戯画の効能：提案三件

稲賀　繁美

三題咄めいて恐縮だが、ここ数カ月のあいだに「発見」した種を三つほどご紹介したい。

## 1　北斎とゴーギャン

編年順に、まず最初はゴーギャンから。図1はB.Danielsson & P.O' relly, *Gauguin journaliste à Tahiti & ses articles des "Guêpe"* としてSociété des Océanistes, Musée de l'homme, Paris, 1966にPL.VIとして複製されたのが初出。この段階でAnna Lagarde嬢の所有、と見える。制作時期は不明だが、1899年末から翌年にかけて、だろう。太っ腹で髭面の男（顔は疑問符になっている）は、解説者によれば、帽子からもそれと知られるとおり、Gustave Gallet総督。左手で肥溜めの樽を支えているが、それは「公衆の憎しみ」と名付けられていて、ガレ総督によってなされた改革が民衆の反感を招いたことへの揶揄だという。

事はタヒチの行政に関する評議会の委員構成の変更で、1899年８月10日にパリで植民地省の布告を取り付けたガレ総督は、11月12日にパペエテでこれを公布する。1897年現在、タヒチ本島および向かいのモオレア島を合わせた現金収入が514,450フランであるのに対し、マルケサス、ツモアツ、ガンビエ、ツバイなどの島嶼部の収入の合計は、これに匹敵する468,850フランだった。しかるに予算額でみると、前者887,100フランに対して後者はわずか96,200フランに止まる。島嶼部の支配者層は、実際にはタヒチ本島、パペエテに籍をおく商人たちが、その大半を占めていた。こうした行政上の不公平を解消するため、ガレ総督は、タヒチおよびモオレアの評議員席数を18から11へと減らす（それまでは総数18の内、カトリック系11、プロテスタント系７）。それと同時に、島嶼部の代表は、今後は総督直々に指名される代表団により構成することとした。この時点で、評議会メンバーのカトリック系の委員のうち６名が、島嶼部の代表だったが、こうして彼等は自動的にその権利を失う。11月19日の選挙の結果、カトリック系はパペエテの４議席、対するプロテスタント系は、タヒチ本島とモオレア島あわせて、都合７議席を維持し、いわば当然のなりゆきとはいえ、大勢は逆転した。

言うまでもなく、カトリック勢は、ガレ総督の方針に反対し、その改革に反旗を翻すことになる。ゴーギャン自身は、けっして首都パペエテで幅を利かすカトリック側の肩をもつ立場ではなかったし、また反対に、かれの住んで居た本島西部のブナアウイアで圧倒的だったプロテスタント勢の利害も、ゴーギャンのそれとは対立していた。だが、地元の政治風刺雑誌『雀蜂』を主宰していた、カトリック勢の有力者カルデイラが、風刺家としてのゴーギャンの才能に着目して寄稿を求めたと思しく、画家は1900年２月から、この雑誌の編集を引き受ける。おそらくはその風刺画として準備されながら、結局日の目を見なかったのが、ここにあげられた作品だろう。その下敷きは、言うまでもなく、葛飾北斎の『北斎漫画』第１編の相撲取り（図２）で、複写の関係か、ゴーギャンの作品では左右が逆転している。

劣悪な保存状態と一部破損のため、文字の判読が困難だが、画面下に、「こんなに重いとは思わなかった」、という総督の愚痴らしきものが書き留められている。表題はどう訳したものか、やや判断に困るが、「力のお稽古」、右うえには、「大臣閣下に捧ぐ」、との皮肉な献辞があり、時の権力者のお手並み拝見、といったゴーギャンの冷かしが見て取れる。葉を落とした樹木にしがみつく猿は、

当時期（1900年前後）のゴーギャンの戯画から類推すれば、書記官であったGénéral Rey。カミーユ・ピサロはゴーギャンの剽窃癖を非難して、「奴はいつだって人様の土地で密猟ばかり、〔最近までの日本やビザンティンの真似に続いて〕今ではオセアニアの蛮人どもから海賊行為だ」、と悪態をついた（1893年11月27日）。だがまさに、こうした自由自在、換骨奪胎の編集技術――パスティッシュ、アサンブラージュ、モンタージュ、デクパージュ――こそ、ゴーギャンが日本という美学から学んだ教訓の核ではなかったか。

欧米の世紀末の前衛にとって、他者の映像をちゃっかり借用してカリカチュアに仕立てることは、大藝術の権威を小藝術によって掘り崩す戦略とも一環をなしていた。だがいささか皮肉なことにも、これは日本側から見れば、北斎があくまで政治戯画の水準の絵師＝職人として扱われたことの証拠ともなりうる。前衛の権化、ゴーギャンに発想を提供した北斎は、それゆえジャポニスムの流行のなかで、日本最大の巨匠に祭り上げられた。だが、それにもかかわらず、あるいはまさにそれゆえにこそ、北斎は、その母国にあっては、西欧的な意味での藝術家の範疇からは、長らく排斥されることとなった。北斎などしょせん戯画に過ぎぬ、といった――阿部次郎らに代表される――戦前教養派の江戸文藝への蔑視の視線。それは阿部もその一員だった『白樺』派の西欧崇拝と、まさに裏表をなす下地にほかならなかった。

## 2　ヴェルシュチャーギンと『アシエット・オ・ブール』

それでは、戯画の下敷きが著名な油彩だった場合はどうだろうか。

帝政ロシア末期の画家として、もっとも公衆に人気のあったひとりに、ヴェルシュチャーギンVasily Vasilevich Vershchagin（1842-1904）がいる。その代表作とも言えるのが、頭蓋骨の山を描いた『戦争の列神式』（別の題名を『鳥葬』とも。1871、モスクワ、トレチャコフ美術館蔵）だろう（図3）。「万骨の兵枯れて一将の功なる」という日本の噂そのままの場面だ、とはこの画家の伝記作家の言葉だ。1387年にイスパハンを占領した、モンゴルのタメルランの事績を描いた歴史画、との説もある。だが、直接には、画家のトルキスタンでの従軍経験から生まれた、現実に取材した作品とみるほうが、よいだろう。これは1873年４月にロンドンのクリスタル・パレスで開催されたヴェルシュチャーギンの個展で、大きな反響を呼んだ作品だった。その直接のメッセージは、ともすれば我々が抱くような「戦争の悲惨」、といったものではなく、当時の報道を信ずる限り、むしろロシアの中央アジアにおける戦争を、大英帝国のインド支配との類推で正当化しようとする政治的プロパガンダの一環をなしていたらしい。フランスの大御所戦争画家ジャン＝レオン・ジェロームやミュンヘンの歴史画家の影響は明らかだが、その容赦ない現実描写には、ロシアならではの冷徹な野蛮さも見て取れる、といった展覧会評も、当時の英国の雑誌に読まれる。展覧会はつづいてザンクト・ペテルスブルクで催され、話題をさらったものの、愛国心や母国の栄光を描くよりは、むしろ戦争の悲惨を容赦なく描きだすかれの作品は、かえってロシア皇帝や軍の不興を買った、とも伝えられる。

ヴェルシュチャーギンは日露戦争に従軍画家として参加し、1904年３月31日、旅順港を出ようとしたロシア軍艦ペテロハヴァロフスクが機雷に接触して沈没した際に、七百名にのぼる乗員ともども、艦と運命を共にした。そしてその２年後、1906年、フランスの絵入り風刺雑誌『アシエット・

オ・ブール』（1906年１月６日号）が、明らかにヴェルシュチャーギンの『戦争の列神式』を利用して、大日本帝国が手にした――あるいは手にし損ねた――賠償金を揶揄することになる（図４）。ヴェルシュチャーギンの原作で、山をなしていた無数の骸骨は、フランスの風刺雑誌では、日本が手にした戦勝金の袋に化ける。元来は髑髏の顎の骨が歯を剥いていた部分が、風刺画では、布袋の結び目に変装される。大金の山なす袋の横には、西洋風の大元帥服姿の正装の明治天皇がいて、こう語っている。「ミカドの金――、これが戦争の賠償金じゃないってことは、いうまでもないよ、ね。そう、これは朕がニコライ２世に売ったひと振りの日本刀の代金なんだ」。明治38年９月５日のポーツマス条約調印によって、莫大な人的損害を伴った日露戦争は終結したが、いわゆる三国干渉により、日本は韓半島における特殊権益、遼東半島の租借権、南満洲鉄道および北緯五十度以南の樺太（サハリン）を手にしたものの、それ以外では大幅な譲歩を迫られ、ロシアからの賠償金も得られなかった。となると、この戯画、いったい何を揶揄したのか、いまひとつ意味が不鮮明だ。画面の金塊袋は、髑髏の出自をかすかに暗示はしている。山と積まれた髑髏の代価として、日本帝国皇帝が金の山を手に入れた、との読解は可能だろうが、おそらくその賠償金が未払いとなった結果、キャプションが結局画面を裏切る事態となったものとも推定できる。

### 3　広重とダリ

髑髏ついでに、最後に取り上げたのが、広重（図５）。熱病を発した平清盛が、館から庭を臨むと、おりからの積雪の中、森羅万象がすべて髑髏に見えた、という怪奇趣味。平家の滅亡を暗示する幻である。アルチンボルドなどのアントロポモルフィズムを自己流に応用して、複数の人物の組み合わせから成る顔の奇想もお手のもの、という国芳も広重と同時代人だから、これにも元来、西洋ネタの発想源が探られるかもしれない。だがさらにその延長で、この作品が、本家本元の超現実主義に、いわば里帰りして影響を与えたのではないか、との可能性も示唆したい。サルヴァドール・ダリの『ヴォルテールの見えない彫像のある奴隷市場』（図６）では、あまり市場らしくもない、とある都市の廃墟のような広場に立つ、楕円形の帽子を被ったふたりのオランダ十七世紀風の人物が、背景と合わさって、巨大なヴォルテールの顔面を構成している。近くでみれば帽子だったはずのものが、遠くから見直すと、十八世紀の啓蒙の哲人の眼窩へと変貌する。どうやらダリは、広重の奇想にもヒントを得て、意図的なチャンス・イメージの再構成に取り掛かったのではあるまいか。ふだん一枚岩と見えた現実が、突如乖離し、おぞましい姿の別の現実が、鑑賞者の網膜に浮かぶ瞬間。その二重像によるゲシュタルト崩壊に、超現実の次元への誘惑があるとするならば、広重もまた正統な意味で、シュールレアリストの先駆者のひとりとして、認知されてしかるべき画家だったことになる。ブルトンの『ブラック・ユーモア選』の増補版の見返しに、あらためて、これら２枚の作品を貼り付けてみてはどうだろう。

実は似たような嗜好から、ゴーギャンは『前後録』の自筆手稿の見返しに、自分の版画に並べて、国綱の浮世絵と、作者不明『化競廓夜櫻』を貼り込む、という工夫をしていた。近年、プリミティヴィズムを巡る議論などでは、西欧の藝術家によってなされた、外部からの借用への批判が囂しい（吉田憲司、圀府寺司編訳『二十世紀のプリミティヴィズム』淡交社の吉田解説を参照）。結局そう

した借用は、原材料を元来の文脈から抜き去り、搾取して、手前勝手な自己正統化に利するかぎりで、植民地主義、帝国主義に加担するもの、と主張する、ジェイムズ・クリフォードの批判的見解などが、幅を利かしている。だが少なくともゴーギャンにあっては、浮世絵と自分の版画とのあいだに、自己中心の上下関係や、一方的な搾取は想定されていない。むしろ彼は――ハンス・ハーケとピエール・ブルデューの著書の題名を借りるなら――『自由交換』（邦訳、藤原書店）の場を、自らの創作を通じて提供している。これを示すのが、拙著『絵画の東方』（名古屋大学出版会）の見返しの意図だったのだが、これに反応してくれた書評には、残念ながらお目にかかっていない。

なお、末筆の蛇足ながら、同書191ページで提案した、ボナール『乳母の散歩』と浅井忠『犬を連れたパリの貴婦人』との比較。著者は自分が「発見者」のつもりで、昨年新潟県立近代美術館で催された『ナビ派と日本』展でも披露した。だが、ひょっとして既にどなたかによる指摘や、当時の証言などがあったのだろうか。万が一、当方に既存の論文などの見落としがあった様ならば、ご教示戴けると誠にありがたい。（西暦2001年１月20日、ザールブリュッケンにて）

図1　ポール・ゴーガン「力のお稽古」1899-1900，個人蔵.
Paul Gauguin *Etudes de Force,* 1899-1900, collection particulière.

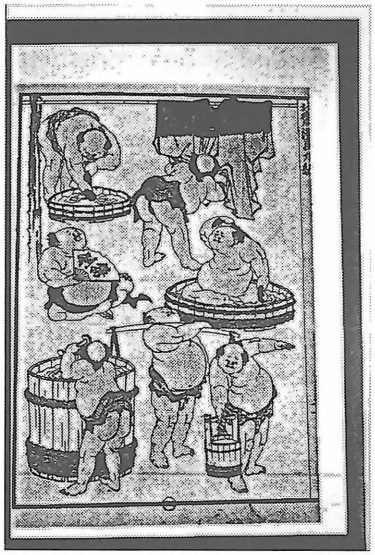

図2　葛飾北斎『北斎漫画』初編より「相撲」1814.
Katsushika Hokusai, "Lutteurs de Sumou," *Hokusai Manga,* Vol.1, 1814.

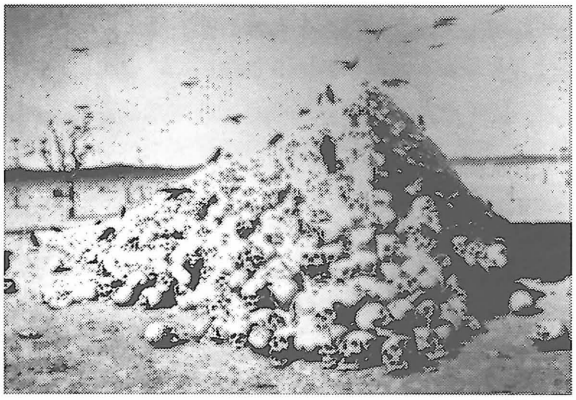

図3　ヴァシレイ・ヴァシレヴィッチ・ヴェルシュチャーギン『戦争の列神式』1871，モスクワ　トレチャコフ美術館.
Vasily Vasilevich Vershchagin, *Apothéose de la Guerre,* Huile sur toile 127×197cm, 1871, Tretiakov Gallery, Moscow.

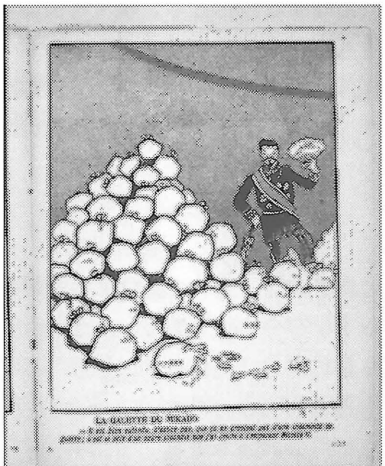

図4　作者不明「御門のお金」,『アシエット・オ・ブール』誌、1906年1月6日号
anonyme, "La Galette du Mikado," *Assiette au beurre,* 6 janvier, 1906

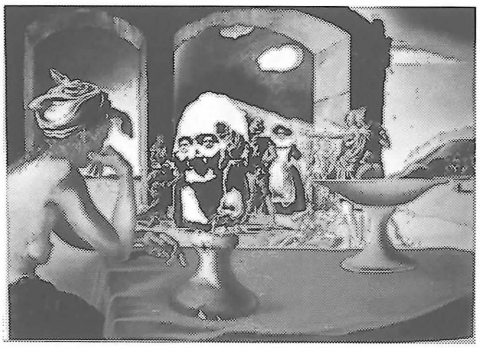

図6　サルバトール・ダリ『ヴォルテールの見えない彫像のある奴隷市場』1940，キャンヴァスに油彩　46.5×65.5cm，フロリダ，ダリ美術館寄託
Salvador Dalí, *Le Marché des esclaves avec un statue invisible de Voltaire,* 1940, Salvador Dalí Museum, St. Pertersberg, Florida.

図5　歌川広重『平清盛怪異を見る図』神奈川県立歴史博物館蔵
Utagawa Hiroshige, *Taira no Kiyomori haunted by weird vision,* Kanagawa Prefectoral Museum of History

Three New Proposals for the Source Research in the Context of *Japonisme*

Shigemi Inaga

This modest paper –or rather a notice– proposes three new hypotheses as for the artistic inspiration in the context of Japonisme.

Firstly, *Études de Force* (fig.1), unpublished caricature by Paul Gauguin (ca.1900) is undoubtedly a re-appropriation made by Gauguin in Tahiti of the Hokusai Manga (fig.2). The fat Sumô wrestler, depicted in the original by Hokusai, is disguised into Gustave Gallet, gouverneur of the French Polynesian Island. By this representation Gauguin criticizes Gallet's recent electoral reform of the General Council. As Camille Pissarro put it, "Gauguin is always poaching on someone's land; nowadays he is pillaging the savages of Oceania" (27 Nov. 1893). However, the essence of the lesson Gauguin learned from the *Japonisme* consisted precisely in the art of decontextualization of visual resources and their free re-appropriation. The Japanese ukiyo-e master offers a convenient pretext for Gauguin to compose a political caricature in Colonial Tahiti.

Secondly, Vasily Vasilevich Vershchagin's *The Apotheosis of the War* (1871) (fig.3) was reutilized by an unknown illustrator of the *Assiette au beurre* (6 jan. 1906) (fig.4), shortly after the end of the Russo-Japan War. The mount of human skulls, suggesting the inhuman aspect of the war, in Russian painter's original oil painting, is transformed, in this caricature, into a mount of sacks full of money, with the title "La Galette du Mikado". And beside these mountain of money bags, the illustrator put the Japanese Emperor, saying "Il est bien entendu, n'est-ce pas, que ça ne provient pas d'une indemnité de guerre; c'est le prix d'un sabre japonais que j'ai vendu à l'empéreur Nicolas II." The image does not necessarily convey the message that the Japanese Emperor could not get the amount of money despite the huge sacrifice of human resources of his own subjects. And the caption suggests something opposite. In short, the intention of the caricature as a whole remains somewhat ambiguous.

Thirdly, one more example of skulls. A supernatural scene of snow-covered Japanese garden, depicted by Utagawa Hiroshige (fig.5), where Taira no Kiyomori (1118—1181), historical figure of the 12th Centrury, is caught, at his zenith of glory, by a hidious daydream, where all the objects in his garden transform themselves into innumerable skulls. The vision presages the fall of the Heishi clan in the near future. It is probable that Salvador Dalí was inspired by this double image by Hiroshige, so as to invent his version in *The Market Place* (fig.6), where the two male human figures with large hat transform themselves into the eye orbits of Voltaire. If this hypothesis is tenable, Hiroshige is now officially entitled to be added among the predecessors of Surréalistes, of whom André Breton made the listing in the preface of *Antologie de l'humeur noir.*

Juxtapositions of these originals and applications would invite us to reconsider the simplistic accusation of Western colonial usurpation of visual resources of the Other, advanced by James Clifford in his criticism to *The Primitivism in the 20th Century Art,* (ed. by William Rubin). Indeed, the dynamics of the migration of iconical images did constitute the real threat to the Euro-centric world view, implicitly shared both by Clifford and Rubin.

## 編集後記

「ジャポニスム研究」第21号を会員諸氏の手元に無事お届けすることができたのは、編集担当者としてこのうえない喜びである。すでにご存じのように、昨年は『ジャポニスム入門』を本学会編として上梓した記念すべき年でもあったが、ジャポニスム研究も新たな節目を迎えているとの感を強くするこの頃である。そうした中で、1999年度の例会としてご講演いただいた川本皓嗣氏が、会員外ながら「英詩のジャポニスム」に関する充実した論考をお寄せいただいたのは、美術史研究者の多い当学会にとって裨益するところ大であろう。今後ジャポニスム研究を多分野に広げていく起爆剤にもなるものと期待している。

その他、本号では稲賀会員の研究ノートや展覧会に関する記事、情報などを掲載し、可能な限り充実を図った。ひところ鎮静気味と思われたジャポニスム関連の展覧会が、意外に多く開催されているのは勇気づけられることであるが、そうした展覧会企画を学会活動とどのようにリンクさせていくかという課題も見えてきたように思われる。さて、今回会報編集を統轄したとは名ばかりの私に代わって、実質的に編集活動を進めてくれたのは、新しく実行委員に加わってくれた鈴木禎宏さんであり、事務作業を的確にこなしてくれた宮坂奈由さんであった。お二人の助力に心から感謝したい。

（編集代表：三浦　篤）

**ジャポニスム研究　第21号**
**Studies in Japonisme, No.21**
**（『ジャポネズリー研究学会会報』後継誌）**
編集　今橋理子・遠藤望・岡部昌幸・猿渡紀代子・鈴木禎宏
・三浦篤・宮崎克己・小泉順也・宮坂奈由
論文査読　実行委員会
発行　ジャポニスム学会
東京都世田谷区砧公園1-2　世田谷美術館内　〒157-0075
*Society for the Study of Japonisme*
*c/o Setagaya Art Museum, 1-2, Kinuta-koen, Setagaya-ku,*
*Tokyo* 157-0075
TEL.（03）3415-6011　FAX.（03）3415-6413
2001年9月30日
制作　㈱三友社
*Printed in Japan,* ©2001 Society for the Study of Japonisme

郵便振込　振込先　口座番号　00100-7-558061
ジャポニスム学会
銀行振込　振込先　三井住友銀行　用賀支店
普通預金　口座番号　3582548
ジャポニスム学会　大島清次